

現代日本人の加齢にともなう主観的幸福感
—TAE を応用した質的研究—

山口美香、得丸さと子

1. はじめに

近年、公衆衛生の整備や医療の進歩に伴い平均寿命が飛躍的に伸び、2009年の日本の高齢化率は22.8%を記録した。高齢化率は今後も伸び続け、2055年には国民の2.5人に1人が65歳以上の高齢者になると予想されている。「老い」をネガティブに捉える事が一般的であるが、「老い」をもっとポジティブなテーマとして考えていく必要がある。このような状況の中で人間が生きる意味を考え、衰えと死に直面する中でより豊かになることを求めていくという課題にいかに取り組んでいくのかという過程は日本のみならず、今後高齢化社会に向かう国々にとって、共通の問題でもある。

本研究では、現代日本の加齢に伴う主観的幸福感を、一人のリタイヤした男性高校教師に焦点を当て、TAE(Thinking At the Edge)を応用した質的研究を用いて分析した。その結果、主観的幸福感の複雑な構造が可視化された。

研究対象者Cさんの、主観的幸福感には、戦後の新しい個人主義的で核家族主義的な幸福の追求と、戦前の地主制度の名残ともみられる封建主義的コミュニティ観への囚われという矛盾があることが窺えた。お遍路さんの旅に出て、亡き妻とのつながりと、地域やお遍路さん同士のつながりを、同時に感じることで得る幸福感は、日常生活での矛盾の保障作用と見ることもできた。そこでは自然とのつながりにも幸福を感じていた。しかし、四国での幸福感の体験は、現実のコミュニティでの生活とは別物と感じられており、これらの要素が、統合されないまま並存するという、Cさんの主観的幸福感の構造が可視化された。日本の高齢者が地域で主観的幸福感を得ることの難しさが、改めて認識されたといえる。

2. 背景

戦後、日本は高度経済成長を遂げ物質的に豊かになったが人々の暮らしは心理的にも豊かになったかどうかは疑わしい。むしろ、心理的問題を置き去りにしたまま、物質的豊かさを追求してきたともいえる。そのゆがみが、現代日本の高齢者が置かれている心理的な状況を複雑(困難)なものにしている。物質的に豊かであるからといって、心理的に幸福であるかどうかはわからない。心理的な幸福感は非常に主観的なものであるから、個人の内面世界を詳細に研究する必要がある。

これまでも、主観的幸福感を捉えようとする試みはおこなわれてきた。最もよく使われるのはロートンの改訂版 PGC モラールスケール (Philadelphia Geriatric Center Morale Scale:Lawton,M.1975) である。改訂版 PGC モラールスケールは、現象をおおまかに捉えたいときに有効な尺度であり、個人の複雑な内的世界を捉えることは意図されていない。

エリクソン(Erikson,E.H)は、老年期を第8段階とし、この段階の解決すべき発達課題を、「自我の統合対絶望」(ego integrity versus despair) (Erik.H.Erikson,(1997) Joan M. Erikson, Helen Q. Kivnick Vital Involvement in Old Age) であるとした。エリクソンの研究は、直接的に主観的幸福感を扱ったわけではないが、自我の統合は「老い」のポジティブな面をとらえている。彼は、EPSI(エリクソン心理社会的段階目録検査 Erikson psychosocial stage inventory を開発している。

Tornstam (1997) が提起した 老いの超越概念 (以下老いの超越と訳す) は、エリクソンが捉えていた第9段階を、カミングとヘンリー(Cumming & Henry)によって提唱された離脱理論(disengagement theory) とからめてモデル化している。Tornstamのこのモデルは、イエスノークエスチョンであり、この尺度では、個人がどのように老いの超越に向かうのかというプロセスにアプローチすることは難しい。

小田(2003)は、トーンスタンのモデルをもとに、日本の高齢者を対象に研究し、現実に高齢

化社会の急激な進行に直面している日本において、高齢者がいかにして老いの超越に向かうのか、あるいは、向かわないのかを研究することが重要であると問題を提起している。

山口（2008）は、トーンスタンがエリクソンを踏まえて主張した第8段階から第9段階への移行は、高齢者の主観的幸福感到深く関わるものと考え、そのプロセスを捉えることを目的に、質問紙調査とインタビュー調査をおこなった。しかし、個人の中で3つの型が複雑に絡みあっていることや、個人によって傾向がことなることを見出された。また、日本の高齢者も「統合」や「老いの超越」という発達課題に向き合っていることは感じられたが、トーンスタンの老いの超越尺度に由来する質問に違和感を表明するインタビューも複数存在し、日本の文化的文脈に合った研究をおこなう必要性が認識された。

本研究は、山口（2008）の継続研究として、現代の日本の高齢者の主観的幸福感を探ることを目的とするものである。この研究では、個人の内面世界に焦点化し、「現代日本人の加齢にともなう主観的幸福感」の様相を探ることを目的とする。

Ⅲ. 方法

山口(2008)の過程で、個人の内面世界に焦点化する必要性が認識されたことから、本研究では、個別事例に着目してインタビューデータを収集し、質的方法で分析することとした。

Ⅲ-1 データ収集の方法

予備調査をおこないインタビューガイドを作成し、現代日本の高齢者を対象にインタビューデータを収集した。

予備調査の結果、3因子構造が見出された。3因子は、「前向きさ」「老いの受容」「役割」と命名した。

インタビューガイドは、この「前向きさ」「老いの受容」「役割」の3因子と、トーンスタンの老いの超越尺度の「宇宙」「一貫性」「孤独」の3次元を代表する質問を、それぞれ作り、それに加えて、過程を捉える質問と、聞きにくいことを聞くためのつなぎの質問を加え、10問からなるインタビューガイドが作成された。

インタビューガイド

1	現在、生活の中で楽しみにしている事は何ですか？（楽しんで取り組んでおられる事はなんですか）生きがい（前向きな体験について）
2	その事は以前からずっとやっていた事ですか 以前はやっていたけど今はやっていない事がありますか →ある→なぜ辞めてしまわれたのですか
3	自然とのふれあいに心地よさを感じますか(自然、つながり等)
4	人生には何か一貫した意味があるように感じられますか
5	家族や友人と過ごす時間はありますか？
6	家族の中や地域の中でのご自身の役割についてどのように感じていますか
7	体力の衰えを感じますか？
8	一人、物思いに更ける時間をどのように感じていますか？
9	（死後）最後は土に帰るのだと思えますか？その事について不安はありますか？
10	今はどのような状態ですか？どのような環境だったら良いと思えますか？

本研究は、個人の内面世界に焦点化するために、個別事例に着目することにした。インタビューの属性は以下のとおりである。

インタビューの属性

男性 Cさん 66歳 家族構成 息子と自分(前の家族構成) 妻: 息子: 娘: 自分、前の職業 : 高校教師
--

インタビューは、インタビュアの自宅で、約1時間半にわたっておこなった。インタビューは録音した。その後、インタビュアは、録音資料の文字起こしをおこなった。(尚、インタビュアは、下記の分析者 A にあたる)。

IV データ分析の方法

ユージン・ジェンドリンら (Gendlin & Hendricks, 2004) が開発した理論構築法 TAE (Thinking At the Edge) を質的研究法に応用しておこなうことにした。

これは、TAE が、長年携わる領域での「うまく言葉にできないが知っている感じ」を言語的に展開するのに適した方法だからである。本研究の分析者は、山口 (2008) を実施した過程で、現代日本の高齢者が独特の方法で「自我の統合」「老いの超越」という発達課題に取り組んでいると感じており、「現代日本人の加齢にともなう主観的幸福感」について、「うまく言葉にできないが知っている感じ」を得ていた。

TAE (Thinking At the Edge) は、「何か言葉にしようとするのだが最初はぼんやりとした『からだの感覚』としてだけ浮かんでくるものを、新しいタームを用いてはっきりと表すための系統だった方法」(「TAE 序文」) である。うまく言葉にできないけれども重要だと感じられる身体感覚を、言語シンボルと相互作用させながら精緻化し、新しい意味と言語表現を産み出していく系統立った方法である。

TAE は、近年、得丸他 (2008) によって、質的研究への応用がなされている。TAE は分析者が1人でも実施できるが、個人カウンセリングを出発点とする手法であるため、2人組みで行い、1人が分析者となり、もう1人がガイドとして分析過程に寄り添うことも多い。ガイドは、分析者が落ち着いて分析対象と向き合える場を作り、分析者の自問自答を促進する役割を担う。分析記録をとる役割も持つ。本研究では、メンバーA が分析者 (以下分析者 A とする)、メンバーB がガイド (以下ガイド B とする) となった。

分析過程は、資料を参照

V 結論と考察

今回の TAE による分析により、研究対象者 C さんの、主観的幸福感について、次のような結論を得た。該当部分のインタビューを逐語録で示す

C さんの主観的幸福感の構造

C さんは、戦後、新しい価値観で新しい家族を作り、核家族 (大家族ではない) で、家族の成長のために働いて来た。それが義務であり喜びであった。自由な個人主義の考えかたで、家族だけれども干渉しすぎない、そういう家族を作ってきた。今も新しい家族のあり方を模索している。彼は、結婚しない息子のために食事を作る新しいタイプの父親である。

例

- ・戦後のいわゆるヨーロッパ的な思想を良しとする時代の中で育ったからやっぱりあの～親に干渉されたくないとかね、何でもかんでも親の言う通りにしなくてもいいといった反発をもって育ってきて、だからあの頃はなるべく結婚したい そして別な家族 戸籍を持ちたい 全く独立したものがこれからの理想の在り方だみたいな風潮がありましたから でそういう中で育って生活してきたんですけど
- ・いる時は息子の分も一緒につくります
- ・食事はね。息子もね、あの外で食べるのがなんか嫌で大体家で作ってます。まあ朝はずっとパンなどで作ることはないんでお茶沸かして野菜と卵かなんかでやるんですけども

一方、地域に対しては、封建主義的な昔の地主制度の考え方が抜けきらず、昔からの掟や、土地の人が決めたことに従うのみで、それを変えたり、土地の人と新たな人間関係を作ったりする努力はしない。家庭菜園のことでアドバイスをもらうという付き合い (地主/小作ではないが) のような、スタイルなら付き合える。地域の活動に参画したり、それを变えたいという意欲はない。

例

・ほんとはね。地域の人たちと友達ができたらそれが一番いいとは思いますが これはやっぱりあの～まあ私なんかは他の地域の人に言わせると他所者で来て まあ ねえ。普段の生活の場で 普通の生活の場にはないですね。ですからなかなか接点もつながらないし、そういうのは時間をかけてゆっくりやっついていかないとダメなのかなって感じてますけどもね。

・ずっと人に干渉されたり気を使ったりする中で生活するのは窮屈で嫌だと一貫して思っていましたからで 今も人にいろいろ干渉されるのは嫌だし自由に気ままにやっついていきたいって思ってますので

・ご近所でまあお付き合いがあるっていうのは E 本さんとそれから畑の手伝いをしてくれる H 沢さんくらいですかね

・じゃあないかなあと思いますよ。毎日毎日ね。で私なんかの所の消毒なんかもやってくれたり (はははは) ええ

主観的幸福感という意味では、家族とのつながりの中で、一人の心地よさを感じる事が、主観的にはもっとも幸福である。地域の人とのつながりを欲してはいるが、お遍路さんに出て、遠方の人にもてなしてもらうことで、これの代用を果たしているともいえる。

例

・回ってるとき 想像してたのは千二三百キロあるもんですから大変だろうなあって思っていたんですけどもやってみたらすごく面白くて で一緒に道ずれがいるわけですね。そういう人の触れ合いだとかそれから自然がやはり四国の自然の中歩いて行くんですごく良かったですね

この後、この方向で、新しい家族のあり方を模索しながら、自らの幸福感(つながり、かつ、一人の心地よさ)を追求しようと考えているが、健康を害したり、自立して生活を送れなくなったりしたときのことは、考えられていない。

例

・生きなくてはいいなあっていう気持ちはありますね。逆にね、病気になって体が動かなくなって生きるのは嫌だと これ皆友達と話していて皆同じこといいですね。ボケたくないって[笑う]だったら一気にその時死んじやったほうがいい・・・みたいなことはお互いに結構しゃべったりしますけどもね

本研究では、現代日本人の加齢に伴う主観的幸福感の捉え方を、一人のリタイヤした男性高校教師に焦点をあてて TAE を応用した質的研究を用いて分析した。

この方法により、研究対象者 C さんは個人主義的な核家族を大切にす新しいタイプの高齢者でありながら、封建的なコミュニティ感が意識の中で残っており二つの矛盾した意識構造が複雑に絡み合っている事が力動的に捉えられた。

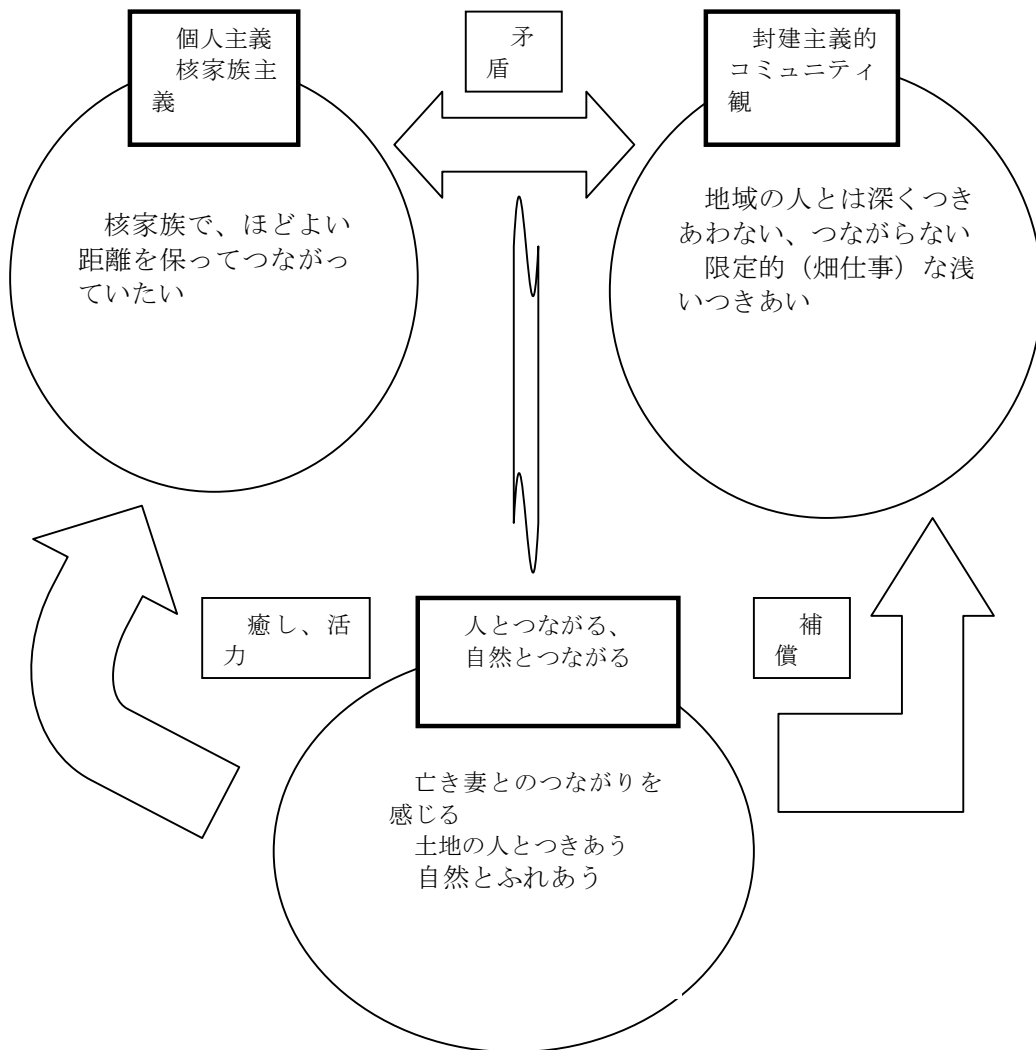
戦後の日本では、古い人間関係に縛られない自由を求める個人主義が広がり、それが社会的な要請でもあった。また農村における封建的社会制度を打破するために農地改革^注が行われた。しかし昔ながらの封建的コミュニティ感(土地を持っている人には従う)が意識の中で残っている。戦後の個人主義的な新しいタイプの高齢者でありながら地域コミュニティの中では、封建的コミュニティ感(小作人ではないのだが土地を持っている人に従う)が抜け切れていないという二つの矛盾した構造がみられ、今後の日本社会が考えていかなければならない問題である。

コミュニティで高齢者を支えたり、支えられたりすることが困難な日本の状況が、個人の内的世界を深く探り、一人の実例を示すことで可視化できた。これは、TAE を用いて個人の内面を深く探り構造化するという方法を用いたことによる結果である。

本研究の結果に基づくかぎりには、新しい家族のあり方を探求し、つながりを得る中で、一人の心地良さも感じられるような環境が、今後の日本の高齢社会のニーズだといえる。しかし、それをどのように実現していくのかは非常に難しい。核家族化が進み若い世代はそれぞれ独立し新しい家族を営むが、高齢者は、必ずしも新しい家族と心地よい距離感を保つ場所で、自立して生活できるとは限らない。

TAE のような、個人の内面を可視化する手法は、主観的幸福感を考察する上で、有効である。

今後、さらにインタビューと分析を重ね、多様な角度から、現代日本の高齢者の主観的幸福感を考察していきたいと考えている。



資料 TAE(Thinking At the Edge)を応用した質的研究の分析過程

分析過程

1)分析開始前

分析手順: TAE のステップ 1 は、フェルトセンスを感じるのところから始まる。

分析過程: 分析者 A が、インタビュー C さんのインタビューの文字起こしデータを読み込んだ。データを読み込み、「現代日本人の加齢にともなう主観的幸福感」について、「明確に言語化できないが知っている感じ」を得た。以下、分析は終始「知っている感じ」のフェルトセンスを感じながらおこなっていく。

2)ステップ1から5

分析手順: ステップ 1 から 5 では、フェルトセンスの非論理的なところに注意を向けた上で、フェルトセンスから出てきた言葉の公的（辞書的）意味と、その過程で、公的な意味ではないフェルトセンス独自の意味が気づかれるようになっていく。

分析過程: 分析者 A が開始前に浸って得た「知っている感じ」に浸りながら、その中核を言語化し、ガイド B が語や句を書き留めた。分析者 A がそれを短い 1 つの文にし、フェルトセンス独自の意味を言語化した。この過程を数回繰り返し、ステップ 5 の終わりに、次のような「知っている感じ」の中核を表す文を得た。

静かで、大きい、ゆっくり、歴史が好き、静かでありのままである。これは日本の良さでもある。ガラガラじゃあないからわかる。

3) ステップ 6 から 9

分析手順: ステップ 6 から 9 では、まず、重要だと感じられる 1 まとまりの話を 1 つの実例とし、それぞれの実例からパターンを見つける。パターンとは、他の実例にも適用できる一般化された表現の文である。次に、たとえば、実例 1 から抽出したパターン 1 を実例 2 に適用してみて気づいたことを書き出し、実例 2 から抽出したパターンを実例 3 に適用するというふうに、実例とパターンの組み合わせを「交差」させて総当たりで適用する。そして、そのつど、フェルトセンスと応答させる。すると、実例の中から、以前には気づかれなかった実例の細部間の関係が、気づかれるようになってくる。オリジナル TAE では 4 つの例を選び、互いに交差する。

分析過程: インタビューデータに戻り、フェルトセンスの全体が表現できるような実例を集めた。全データの多様な側面を捉える全 14 の実例が選ばれた。しかし、本研究ではデータ量が多いため、必要と感じられる数だけ抽出した。次に、選ばれた 14 の実例からパターンを抽出した。

表 1 事例と型の抽出(ステップ 6、7)

事例	パターン
事例 1. ええ で息子も私が家にいない時なんかも決して外食しないでうち帰ってきて自分で作ってますね 事例 2. いる時は息子の分も一緒につくります	パターン 1. 家族が大事
事例 1. ていうかやっぱり外人で日本の良さをしっちゃったらこれすごい魅力なんだろうなあていう自分たちは日本人だから自然にそうなっちゃってるけど外国人にしたらいろんな日本の古い文化財とかみたらすごい感動するのはわかるような気がしますね。私お遍路やってる時に最後は外国人と歩いたんですよ。 事例 2. 私なんかの世代は戦後の戦前の封建的な時代とは違い反封建的な時代ですから、封建的な時代の良さが大家族制にはあったじゃあないですか	パターン 2. 日本の良さを知っている

ここで、オリジナル TAE にはないが、筆者らの独自の工夫として、該当パターンが当てはまる他の実例を全データから抜き書き出す「パターンシート」を考案し、作成した。パターンシート

を考案した理由は、研究としておこなう場合、代表例にもれがないか、反対例がないかなど、網羅的にチェックする段階が必要だと考えたからである。チェックする段階で、類似の実例が多く出てきた場合はまとめながら作業すると効率的であると判断し、パターンシートを考案した。考案するにあたってはM-GTAの分析ワークシートを参考にした。例をあげる。

表2 パターンシート

S.2 頁 8 行目	地域の関係が薄いのは土地の人間ではないから
	C: ずっと人に干渉されたり気を使ったりする中で生活するのは窮屈で嫌だと一貫して思っていましたから 自由に気ままにやっていきたいって思っていますので大家族の中で今度 生活するとしたら自分の個人の中ではそれはどうかなあって感じですね。大家族が何か家族のアレっていうのは経済的に農家とか生活と仕事が加算をもとにして経済が成り立っている中で出て来たんだと思うんですね
同じパターンが現れている実例	
まあすぐ隣なんですけども (ははは) それで E さんの菜園を借りてまあやっています。もう十何年になりますけども で畑をこれ趣味って事でもないですけど無農薬で自然の野菜ができるっていうのでまあやっています。	
メモ: 土地の人間には従うのはあたり前	

さらに、すべてのパターンを相互に交差させ、フェルトセンスと応答させながら、新たに浮かび上がってくる知見を書きとめた。事例1のパターンを事例2のパターンに適用し、事例2のパターンを事例3のパターンに適用する、というように順次、182の組み合わせを検討した。その後、ここまでの分析で気づいたことを、自由に書きとった。

表3 パターン交差シート

1.高校時代の仲間とつきあう		4) ステップ 10 か
パターン	交差して気づいたこと	
2.普通であることの良さを感じている	仲間同士だと素のままですらられる。気を遣わなくていいので楽だ	
3.有意義な人生を送りたいと思っていたが、今はありのままがよいと変化した	高校時代の仲間とはありのままにつきあえる。青年期に仲間になり、一生付き合っていけそうな友達がいる。家族ではないけれども親密な関係を構築できる	

ら 12

分析手順: ステップ10から12は、理論を構築する段階である。ここでは、文の持つ文法的な推論力が活用される。まず、フェルトセンスの中核を表現する重要語を数語、導出した上で、あらかじめ用意された文型“A is B” (Step10), “A is inherently B” (Step11) のA, Bに当てはめ、フェルトセンスで感じる。“inherently”とは「本来」あるいは「もともと」という意味の英語である。感じながら、文をフェルトセンスの意味に合うように修正したり、新しい重要語を導出したりする。外から与えられた文型の推論力とフェルトセンスの両方にアクセスし、フェルトセンスに応答させることを通じて、重要語間の関係が気づかれていく。

次に、最終的な用語を選び直し、重要語を相互に組み込んで定義する。諸用語が互いに組み込まれた構造体ができる。TAEではこれが理論であると定義されている。構造体に組み込まれた重要語は概念と呼ばれる (Step12)。ステップ12の後半では、理論を発展させる方法が示されている。諸概念の相互定義の重要語を、別の重要語で機械的に置き換え、フェルトセンスで感じる。用語を機械的に置き換えても、文がもともと持つ文法的推論力は保持される。文とフェルトセンスの両方にアクセスしていると、フェルトセンスは応答を返してくる。なぜそう言えるのかに焦点を合わせて言語化していくと、フェルトセンス由来の概念の含み込む意味が、より精緻になっ

ていく。

分析過程：

Step:10

フェルトセンス全体を表現する重要語（語句）を 3 つ選んだ。A「ありのまま」 B「家族」 C「一人の心地よさ」が選定された。「A は B である」に語句を補足してフェルトセンスに合う文を作った。BC, CA も同様に行い、下の文を得たⁱ。

A=B	ありのままは家族である
B=C	家族は一人の心地良さである
C=A	一人の心地良さはありのままである

Step:11

次に「A はもともと B の性質をもっている」の文を作り、フェルトセンスと照合し、AB の本来の関係を表す語を呼び出した。BC, CA も同様に行った。→の右に新用語を示す。

- ・ありのままは、本来（もともと）、家族である→干渉されたくない
- ・家族は、本来（もともと）、一人の心地よさである→大家族への反発
- ・一人の心地良さは、本来（もともと）ありのままである→土地の人間

Step:12

フェルトセンス全体を表現する最終的な重要語を 3 つ選びなおした。O「土地の人間」、P「自分の家族」 Q「ありのまま」が選定された。

Step : 12

O「土地の人間」 P「自分の家族」 Q「ありのまま」を相互に定義し、次の相互定義文セットが得られた。

OPQRS の相互定義文セット

O 土地の人間は、従わなければならないから変化しないものであり、一人の心地よさを感じさせてくれないものであり、自分の家族のように自分の意志で作ったものではないから、一緒に成長できない。

P 自分の家族は、一緒にいても自分の意志を言えるから変化させられる、変化が見られるもので、一人の心地よさを感じさせてくれるものであり、土地の人間のように従わなければならないものではない。

Q 一人の心地よさは、自分の意志を言えない従わなければならない土地の人間の中では感じさせてもらえず、自分の意志を言える自分の家族の中で変化を味わうことができる。

R 自分の意志は、自分の家族と一緒にいるときに変化を感じられるものであり、一人の心地よさと関係があり、従わなければならない土地の人間には、言えないものである。

S「従う」は変化がないが、土地の人間に従うことであり、自分の意志を言える自分の家族といるときは、「従う」ことがないから変化させられることができ、一人の心地よさを感じるのである。

この後、上の相互定義文セットに対して、1) R「自分の意志」、S「従う」 T「変化」、を追加し、2) 「一人の心地よさ」と「ありのまま」を入れ替える、「変化」を「新しさ」に入れ替える、「変化」を「成長」に入れ替え、フェルトセンスに照らして感じたことをメモする作業をおこなった。

最後に、主要な用語を、「土地の人間」「自分の家族」「一人の心地よさ」「自分の意志」「従う」「変化」「ありのまま」「新しさ」「成長」の 9 個に確定した。それぞれを最低 1 回使い、用語の追加や入れ替えによって気づいたことを反映させ、相互定義文の内容を表現した。これがステップ

12 での最終的な理論の骨格である。

最終的な理論の骨格

新しく作った「自分の家族」は、「自分の意志」で「変化」させられるものであり、「成長」するものである。「自分の意志」を言えるから、「ありのまま」で、「一人の心地よさ」を感じることができる。「土地の人間」は、「従う」ものであり、変化させられないもので、成長しないものである。土地の人間には自分の意志を言えない。

5) 分析の終了

分析手順；ステップ 13 は、作った理論を、テーマとする領域以外のところに応用し、ステップ 14 は、テーマとする領域に再適用して、気づきを得るステップである。TAE ステップ 14 に、「一旦理論ができる、理論が本来持つ推論力によって、フェルトセンスにアクセスすることなしに、さらなる言語化、定式化が続くことが可能となる。そして、論理的推論力から導き出された言明を、フェルトセンスで感じ、応答させることによって、さらに新しい局面が気づかれていく」(Gendlin & Hendricks, 2004 : 23) とある。

出来上がった理論を、あらためてデータに適用し、気づいたことをまとめ直した。この過程も、当初からテーマとしている、「現代日本人の加齢にともなう主観的幸福感」についてのフェルトセンスを感じながらおこなった。

分析過程：理論作りが完了する頃から、戦後日本の農地改革の問題に、自然に話が及んだ。分析者 A が中心となって話した。この過程で、次のことが気づかれた。

最終的な理論の骨格にある「土地の人間」は、古い地主制度の名残で、今でも、日本社会には、「古くからその地域の土地を持っている人」に、他の人が従う考え方が広く残っている。それは、昔、小作農が地主に従っていた名残ではないだろうか。

以上の気づきを得たのちに、インタビューのデータに戻った。インタビューの「土地の人との関係」「家族との関係」を対応させて整理することが可能であることに気づいたので、表にすることにした。また、インタビューの語りの中で重要な位置を占めていると感じられる「お遍路さん」も、関係づけて示すことが可能であるとの気づきが得られたので、同一の表にまとめることにした。

表 4 他のテーマと比較 (お遍路さん)

土地の人	家族	お遍路さん (四国の八十八か所のお寺を巡礼する)
<ul style="list-style-type: none">・封建主義・大家族 ・地主・成長しない・模索しない (普通どおり、昔通り)	<ul style="list-style-type: none">・個人主義・核家族 ・小作 (小作でないのに)・成長する・新しい形を模索	<ul style="list-style-type: none">・自分の意思で決められる・同行 2 人 (一人で巡っても常に弘法大師と一緒に (この場合亡き妻)) ・自己内省 (成長する)・何かを模索 (自分自身を模索)

表にまとめたことに基づき、「お遍路さん」に行くことを、今回の分析で作った「最終的な理論の骨格」にあてはめたところ、下のようになった。この作業により、インタビューにとっての「お遍路さん」の意味が明らかになったとともに、インタビューの、家族と地域に対する考え方もより深く理解できた。

最終的な理論に「お遍路さん」をあてはめる

お遍路さん (になることは) は、自分の意志で行こうと決めるものであり、自己内省などができて自分は成長できる。自分の意志は言えないけれども、行く／行かない／帰るなど選択の自由がある。非日常になり (自然もあり)、ありのまま、一人の心地よさを感じることができる。土地の人間 (四国の人) は、(お遍路さんの服装などに従っているが)、土地の人間は (従うもので

はなく)もてなしてくれるものであり、四国の土地の人にも、お遍路同士でも、知り合いになり、亡くなった妻のこと、供養したいこと、病気のことなど、話したいことが話せる(成長する)。お遍路さまをもてなす(お接待)四国の人は、昔と変わっていない。昔ながらのありかた(土地の人は昔ながら)。

今回の分析により、個人主義的な新しいタイプの高齢者(核家族)と、昔ながらの日本のコミュニティ感(封建的なコミュニティ)という二つの矛盾が意識の中で伺われた。

表 5 分析結果によるまとめ

個人主義(個(男)と個(女)の恋愛によるつながり(核家族)	封建主義(家と家のつながり)	今後の日本社会の課題
核家族	戦前の地主制度の名残ともみられる封建主義的コミュニティ観への囚われ	高齢者を支えたり、支えられたりすることが可能となる社会

超高齢社会の現代で、地縁、血縁が希薄化し、地域コミュニティのあり方が問われている。しかし地域コミュニティで高齢者を支えたり、支えられたりすることが困難な意識構造が、個人の内的世界を深く探り、一人の実例を示すことで可視化できた。

References

小田利勝 (2001) サクセスフルエイジングのもう一つの観点—ジェロトランスセンデンス理論の考察— 『神戸大学発達科学部研究起要』 8 255-269

『日本女子体育大学紀要』 39 p59-p69

得丸智子 (2008) TAEによる文章表現ワークブック 図書文化

Cumming & Henry, (1961). *Growing old: The process of disengagement*. New York : Basic Books.

Erikson, Erik. H., Joan M. Erikson, & Helen Q. Kivnick, (1997). *Vital Involvement in Old Age*. New York & London: W.W. Norton & Company.

Eugene T. Gendlin, (2004). *Thinking at the Edge : A New Philosophical Practice*. *The Folio*,19(1), pp.12-24.

Havighurst, R.J.(1980). "Successful Aging." In R. H. Williams, C. Tibitts & W. Donahue (Eds.), *Processes of Aging: Social and Psychological Perspectives*, Vol.1 pp.299-320

Lawton, M.P.,1975,"The Philadelphia Geriatric Center Morale Scale: A Revision," *Journal of Gerontology* 30: 85-89

Tornstam,L 2003; *老いの超越 A developmental Theory of Positive aging*, New York, Springer Publishing Company

Tornstam, L (2003). *老いの超越 from Young Old Age to Old Age Aging*. Online publication from The Social Gerontology Group, Uppsala

URL:<http://www.soc.uu.se/publications/fulltest/gtransoldold.pdf>

ⁱ ジェンドリンのオリジナル TAE では、ステップ 10 で A=B, A=C, B=C をおこない、ステップ 11 で”A

is inherently B.” “A is inherently C.”のみをおこなうが、ここでは、ABCを循環的に関係づける手順に変更しておこなっている。